

荷風全集

第三卷

岩波書店

昭和三十八年 八月十二日 第一刷發行
昭和四十六年 四月五日 第二刷發行

荷風全集第三卷
定價 八百五十圓

著 者 永 井 壯 吉

發 行 者 岩 波 雄 二 郎

發 行 所 株式會社 岩 波 書 店

東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號

目次

あめりか物語	一
船房夜話	五
牧場の道	二七
岡の上	二九
醉美人	五
長髪	六
春と秋	八
雪のやどり	九
林間	一〇
悪友	一七
舊恨	二三
寢覺め	一四

一月一日	一六七
曉	一七七
市俄古の二日	一九九
夏の海	二二五
夜半の酒場	二三七
落葉	二三七
夜の女	二四五
ちやいなたうんの記	二六七
夜あるき	二七九
六月の夜の夢	二八九
舍路港の一夜 あめりか物語 餘篇	三三三
夜の霧 あめりか物語 餘篇	三三二
夏の海 あめりか物語 異文	三三一
ふらんす物語	三四五
船と車	三四九

目次

ローン河のほとり	三六五
秋のちまた	三七三
蛇つかひ	三八三
晩餐	四〇三
祭の夜がたり	四一九
霧の夜	四四一
おもかげ	四五七
再會	四七三
ひとり旅	四八九
雲	四九九
巴里のわかれ	五四一
黄昏の地中海	五五九
ポルトセツト	五六九
新嘉坡の數時間	五七九
西班牙料理	五八九

橡の落葉	五九五
橡の落葉の序	五九六
墓詣	五九八
休茶屋	六〇六
裸美人	六〇八
戀人	六二二
夜半の舞蹈	六二七
美味	六三三
ひるすぎ	六三五
舞姫	六三七
モーパサンの石像を拜す	六三二
歌劇フォーストを聴くの記	六三七
後記	六四五

あめりか物語

明治三十六年の秋十月の頃より米國に遊びて今茲
明治四十年の夏七月フランスに向ひてニューヨ
ークを去るに臨み、日頃旅窓に書き綴りたるもの
を採り集めて、あめりかものがたりと題し、謹ん
でわが恩師にして恩友なる小波山人巖谷先生の机
下に呈す。明治四十年十一月里昂にて 永井荷風

Mais les vrais voyageurs sont ceux-là

seuls qui partent

Pour partir ; cœurs légers, semblables aux

ballons,

De leur fatalité jamais ils ne s'écartent,

Et, sans savoir pourquoi, disent toujours :

Allons !

(Le Voyage — Ch. Baudelaire.)

唯だ行かんが爲めに行かんとするものこそ、
眞個の旅人なれ。心は氣球の如くに軽く、身
は惡運の手より逃れ得ず、如何なる故とも知
らずして、常に唯だ、行かん哉、行かん哉と
叫ぶ。

(旅——ボードレール)

船
房
夜
話

何處にしても陸を見る事の出来ない航海は、殆ど堪へ難い程無聊に苦しめられるものであるが、横濱から亞米利加の新開地シアトルの港へ通ふ航海、此れもその一ツであらう。

出帆した日、故國の山影に別れたなら、船客は彼岸の大陸に達する其の日まで、半月あまりの間、一ツの島、一ツの山をも見る事は出来ない。昨日も海、今日も海——何時見ても變らぬ太平洋の眺望と云ふのは唯だ茫漠として、大きな波浪の起伏する邊に翼の長い嘴の曲つた灰色の信天翁の飛び廻つてゐるばかりである。その上にも天氣は次第に北の方へと進むに連れて心地よく晴れ渡る事は稀になり、まづ毎日のやうに空は暗澹たる鼠色の雲に蔽ひ盡さるゝのみか動もすれば雨か又は霧になつて了ふ。

私は圖らずも此淋しい海の上の旅人になつた。そして早くも十日ばかりの日數を送り得た處である。晝間ならば甲板で環投の遊び、若しくは喫煙室で骨牌を取りなぞして、どうか斯うか時間を消費する事が出来るけれど、さて晚餐の食卓を離れてからの夜になると、殆ど爲す事が無くなつて了ふ。且つ今日あたりは餘程氣候も寒くなつて來たやうだ。外套なしではとても甲板を歩いて喫煙室

へも行かれまいと思ふ所から、私は其の儘船房に閉ぢ籠つて、日本から持つて來た雜誌でも開かうかと思つて居ると、其の時室の戸を指先でコト／＼と軽く叩くものがある。

「お這入んなさい。」と私は半身を起しながら呼掛けた。

戸が開いて、「どうした。又少し動くやうぢや無いか。弱つとるのかね。」

「寒いから引込んで了つた。まア掛け給へ。」と云ふと、

「全く寒いな。アラスカの沖を通るんだと云ふからな。」と餘り濃くない髯を生した口許に微笑を浮べながら、長椅子の片隅へ腰を下したのは柳田君と云つて航海中懇意になつた紳士である。

中肉中丈、年は三十を一ツ二ツも越して居るらしい。縞地の背廣の上に褐色の外套を纏ひ、高い襟の間からは華美な色の襟飾を見せて居る。何處となく氣取つた様子で膝の上に片脚を載せ、指環を穿めた小指の先で葉巻の灰を拂ひ落しながら、

「日本なら今頃は随分好い時候なんだがな……………」

「さう、全くだよ。」

「何か思ひ出す事でもありやしないかね。」

「はゝは。其ア君お隣りの先生へ云ふ事だ。」

「うむ。お隣りの先生と云へば如何して居る。又例の如く引込んで居るんだらう。呼んで見やう

ぢや無いか。」

「よからう。」と私は壁をトン／＼と二三度叩いて見た。少時は答へが無かつたが、聴て隣りの船房に居る岸本君と云ふのが、私の船室の戸口へ顔を出した。

「ハロオ、カムイン。」とハイカラの柳田君は早速氣取つた發音で呼掛けると、

「有難う。此様風をして居るですから……。」と岸本君は其の儘佇立んで居る。

「さ、這入り給へ。」と私は長椅子から立つて立掛けてある疊椅子を廣げた。

岸本君と云ふのは矢張三十近くの稍身丈の低い男で、紬の袴とフランネルの一重を重着した上に大島の羽織を被つて居る。

「ぢや、失禮します。」と鳥渡腰を屈めて椅子に坐りながら、「洋服はどうも寒くて不可んですから、寢衣で寝やうかと思つて居たです。」

すると柳田君は、岸本君の顔を見ながら、

「洋服は寒いですか。」と如何にも不審だと云ふ語調で、「私なんぞは、然うすると全く反對ですね。増して此様航海中なんか日本服を着やうものなら、襟首が寒くて忽ち風邪を引いて了ふです。」

「さうですか。其れぢやア、私は未だ洋服に慣れ無いんですな。」

「柳田君、君は飲む口なんだから、どうです、命じませうか。」

「いや。今夜は餘り欲しくは無いです。唯だ退屈だから談話に遣つて來たです。」

「だから、話をするには矢張コツプが無いと面白くないでせう。」と私は鈴を押しながら、「又例の氣焰を聞かうぢやありませんか。ねえ、岸本君。」

然し岸本君は返事をせず傾けた顔を起して、「又、大分動いてゐる様ですね。」

「君。何にしても太平洋だよ。」と柳田君は再び薄い髭を拈つた。ボーイが戸を開ける。

「柳田君、君は例の如くウキスキーですか。」

「勿論」と云ふ返事を聞いてボーイは靜に戸を閉めて立去つたが、其の時吠るやうな太い汽笛の響に續いて、甲板へ打上げる波の音がした。

「成程、少し動搖するね。まあ可いさ。今夜は一ツ愉快的な雜談會を催したいもんだな。」と柳田君は安樂さうに足を踏み伸したが、和服の岸本君は明い電氣燈の輝つて居る室の天井を見廻しながら、「どうしたんです。非常に汽笛を鳴らすぢやありませんか。」

「霧が深いからでせう。」と柳田君が説明し掛けた時ボーイは命じた酒類を盆にのせて持運んで來た。そしてベッドの傍の小さいテーブルの上に置きコツプへついで後再び室を出て行く。

「グツドラック。」と柳田君が第一にコツプをさげたので、私等も同じやうに笑ひながらグツドラックを繰返した。

何時なんじになつたのか遙はるかに時間を知らせる淋しい鐘かねの音が聞える。波は折から次第に高まり行くと見え、今はベッドの上の丸い船窓ふねまどへ凄すさましく打寄せる響がすると、甲板こうの方に當つて高い檣はしらを掠かすめる風の音が、丁度東京で云ふ二月のカラ風を聞くやうで、其れに連れては何處とも知らずギイ／＼と何か物の軋きしむ響も聞え始めた。然し私等は最早や航海には馴れて了つた處から別に酔ふやうな處は無い。窓や戸へ帷幕カーテンを引き蒸氣スチームの溫度で狭い船室へやの中を暖かにして、安樂椅子へ凭もたれながら外部の暴風雨ちかしを聞いてゐると、却かつてそれとも無しに冬の夜に於ける爐邊ろへんの愉快が思ひ出される。ハイカラの柳田君も同じ感情に誘はれたのであらう、ウキスキーの洋盞さかづきを下に置いて、

「ねえ、君。自分の身體からだが安全だと云ふ事を信じて居ると、外を吹いて居る暴風雨ストームと云ふものは、何となしに趣味のあるやうに聞えるですな。」

「眞實まったく、これが大船に乗つた心持こころもちと云ふのでせうな。然し若しか、帆船はまへせん前船見たやうなものだつたら、如何どうでせう、随分難船なんせんしないとも云へませんぜ。」と岸本君は眞面目らしく云つた。

「何事に寄らず皆みんなな然さうですよ。一方で愉快を感じるものがあれば、其の爲めに一方では屹度きつと苦痛くつうを感じるものが起おこるです。火事なんぞは焼かれるものこそ災難だが、外ほかのものには三國一の見物みものだからね。」とウキスキーの酔よひが廻つたのか、私は何か分らぬ屁理窟へりくつを云ふと、

「眞理だよ。實際眞理だよ。」と柳田君は深くも何か感じたらしい様子になつて、「君の比喩ひよに従